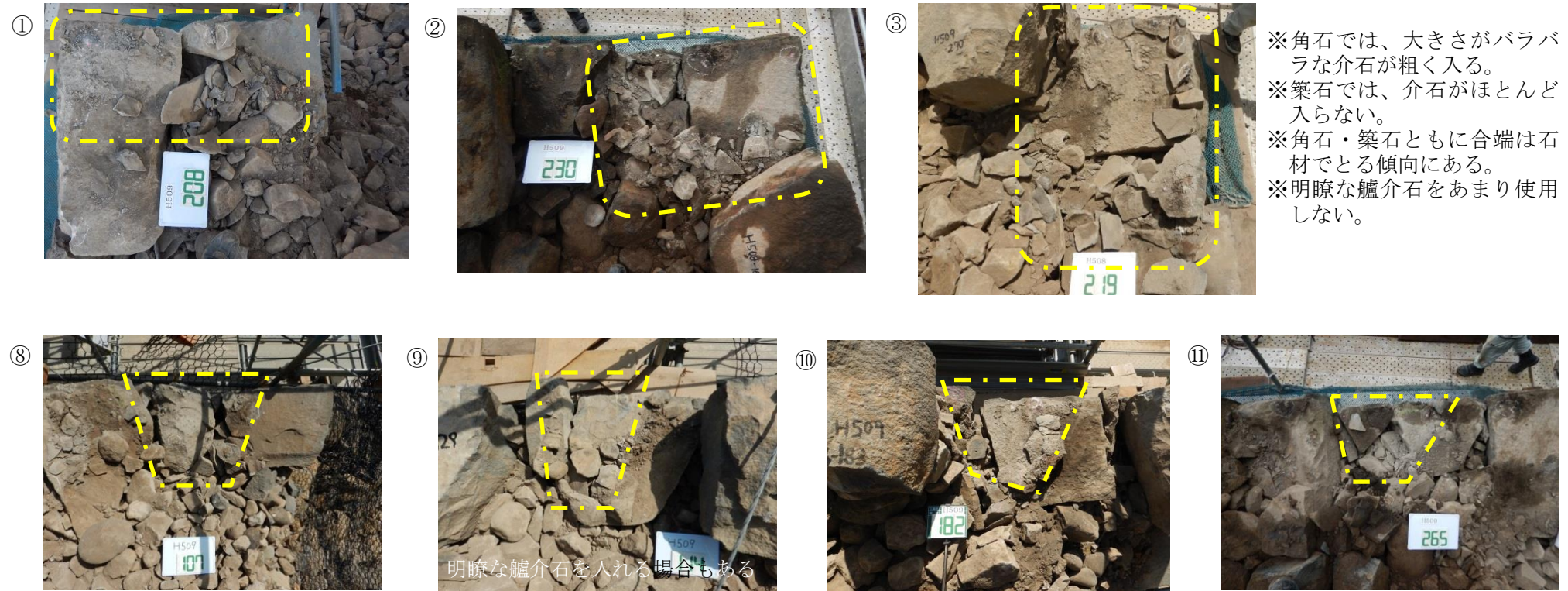


石垣解体調査成果について



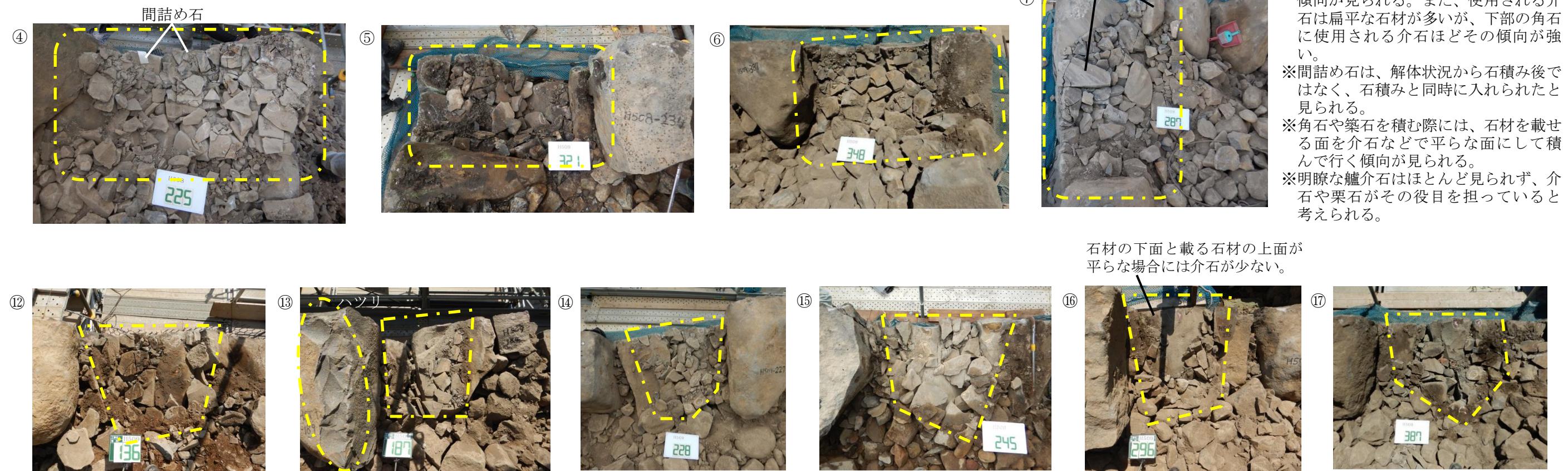
----- 角石・築石が載っていた範囲

明治以降に積み直された範囲の解体状況



※角石では、大きさがバラバラな介石が粗く入る。
※築石では、介石がほとんど入らない。
※角石・築石ともに合端は石材でとる傾向にある。
※明瞭な臙介石をあまり使用しない。

江戸期と考えられる範囲の解体状況



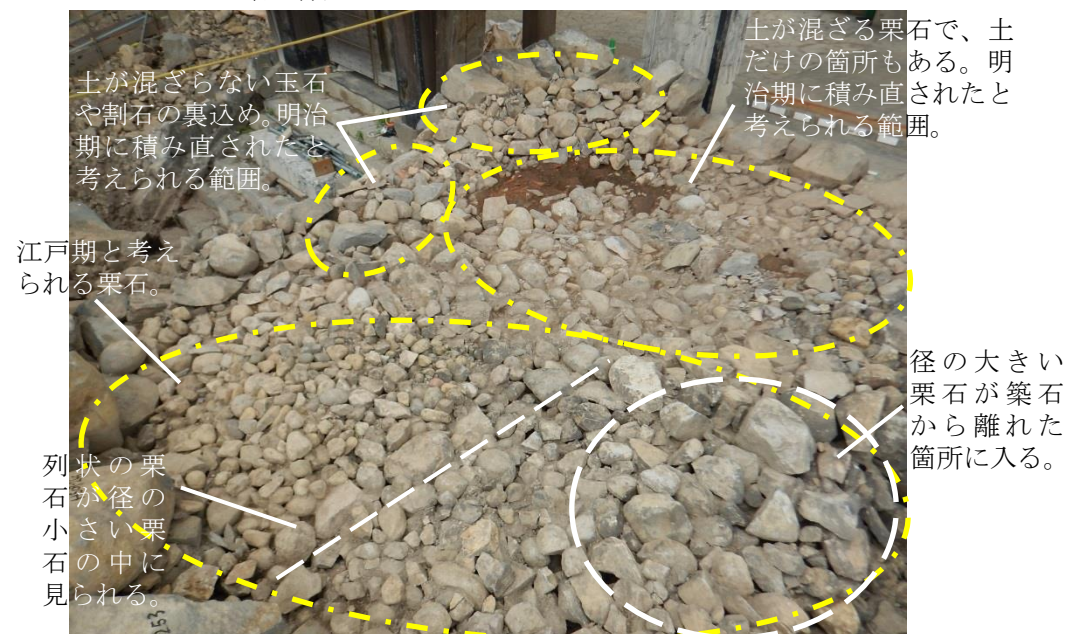
※角石では、大きさが比較的揃う介石が密に入るが、稜線部分周辺には少ない傾向が見られる。また、使用される介石は扁平な石材が多いが、下部の角石に使用される介石ほどその傾向が強い。
※間詰め石は、解体状況から石積み後ではなく、石積みと同時に入れられたと見られる。
※角石や築石を積む際には、石材を載せる面を介石などで平らな面にして積んで行く傾向が見られる。
※明瞭な臙介石はほとんど見られず、介石や栗石がその役目を担っていると考えられる。

小天守台石垣の裏込め解体状況

3 段目の築石背面



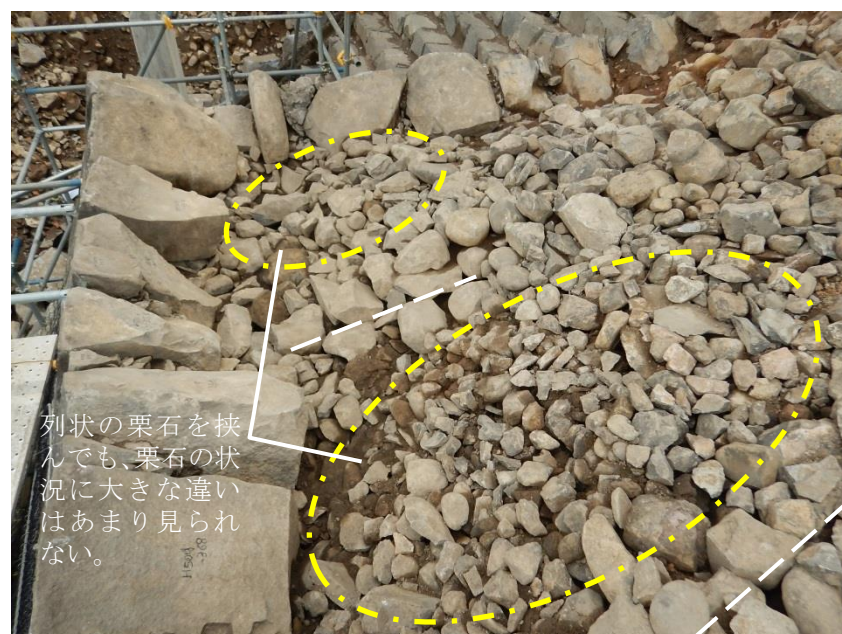
10 段目付近の築石背面



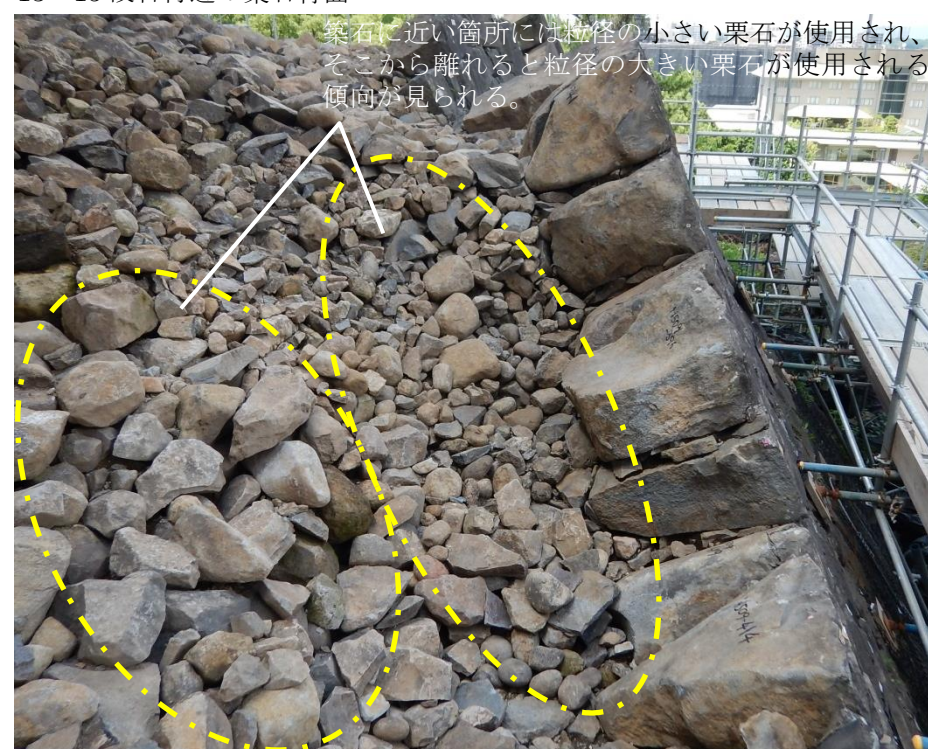
9～11 段目付近の築石背面



10～14 段目付近の築石背面



13～15 段目付近の築石背面



- ※積み直しと考えられる範囲では、土が混ざらない裏込めと土が混ざる裏込めを確認した。いずれからも焼けた瓦が出土しているため、明治以降に積み直されたと考えられる。
- ※積み直し範囲の土が混ざらない裏込めは、小天守台の入口付近に分布している。
- ※江戸期と考えられる範囲では、人頭大程度の栗石が裏込めとして多く使用しているが、築石付近では拳大程度の栗石が集中する傾向が見られ、その傾向は解体範囲の下部ほど強い。
- ※江戸期の裏込めでは、粒径の小さい栗石の中に粒径の大きい栗石が列状に石垣面に直行するように並ぶ箇所が見られる。また、列状の栗石の両側で栗石の状況に変化は見られない。

小天守台石垣出土遺物



- ※遺物は積み直し範囲と考えられる裏込めから出土している。特に瓦が多く、各種の瓦が出土した。
- ※滴水瓦では、複数の記念銘瓦が出土しているが、その中でも慶長4年銘の滴水瓦が多く出土している。
- ※軒丸瓦では、九曜紋が多いが日足紋もそれに次いで多く出土している。
- ※小天守でも不明壺が出土しているが、大天守では土師質のものがほとんどであったのに対して、小天守では陶器質のものが多数を占めている。